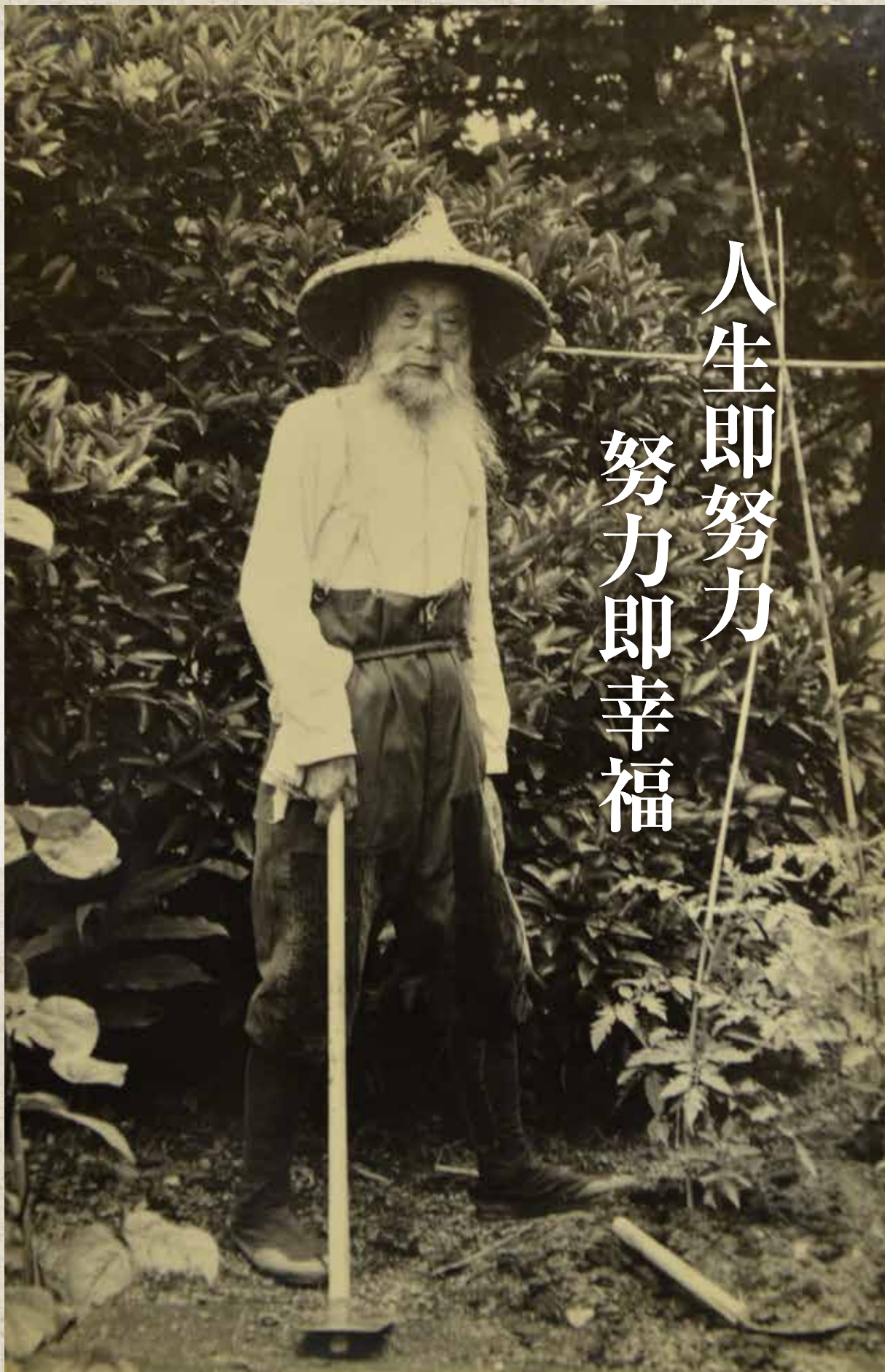


本多静六博士没七十年記念写真集

人生即努力
努力即幸福



本多静六博士を顕彰する会

本多静六博士没七十年記念写真集

人生^{すなわち}即努力、努力^{すなわち}即幸福

発刊にあたって

本多静六博士が昭和27年（1952）1月27日に逝去されて、70年余が過ぎました。そこで本多静六博士を顕彰する会では、これを機に写真集を計画し、この度関係各位のご理解ご協力のもと刊行の運びとなりました。

本会は平成4年に本多静六博士を記念する会として発足し、主に「本多静六通信」の発行を事業としてまいりましたが、平成19年7月に現在の顕彰する会に組織変更してからは、本多静六通信の他に「生誕百五十年記念誌」の発行をはじめ、「本多静六博士の森」の維持管理、市民を対象とした博士ゆかりの地訪問事業の実施、本多静六記念館でのボランティアガイドなど、様々な事業に取り組んでまいりました。

また、これまでの間、本多家の皆様をはじめ、関係各位のご協力により多くの貴重な資料を調査収集することができました。収集されました資料の多くは、久喜市並びに久喜市教育委員会の適正な管理のもと、これからも長く保管され、研究者等への利用に供されるものと思っております。

今回、この写真集に掲載した写真資料の多くは本多家をはじめご親戚の皆様から久喜市に寄贈されたものを中心に、久喜市教育委員会文化財保護課の皆様のご指導、ご協力により発刊につながったものでございます。

編集・刊行に当たり、お世話になりました関係者の皆様に改めて厚く感謝申し上げます。この写真集が本多静六博士に関心を寄せる皆様にとって、有意なものとなることを願い発刊にあたってのご挨拶とします。

令和6年3月

本多静六博士を顕彰する会
会長 渋谷 克美



発刊を祝して

久喜市長 梅田 修一

本多静六博士の没七十年記念写真集が刊行されますことを、心からお祝い申し上げます。

本多静六博士を顕彰する会の皆様におかれましては、本多静六通信の発行やゆかりの地訪問、本多静六博士の森の管理などにご尽力いただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

本市の名誉市民である本多静六博士は、日本初の林学博士で、「日本の公園の父」と称され、全国に誇る郷土の偉人であります。博士は、日本最初の洋式公園である「日比谷公園」をはじめとした日本各地の公園の設計、明治神宮の森の造営など多岐にわたる功績を残されてきました。

本市では、博士の功績を称えるとともに後世に広く伝えていくため、様々な顕彰事業を実施しているところです。その一つとして、小学生向けの副読本「日本の公園の父 本多静六」を発行しており、博士が日本各地の公園の設計に携わったことや自身の苦学の経験から生まれた処世訓などを紹介しております。

また、博士の生誕の地として、令和9年4月の開園に向けて「(仮称)本多静六記念 市民の森・緑の公園」の整備を進めております。博士の遺志を受け継ぎ、この公園が緑豊かで多くの市民の憩いの場となるよう取り組んでまいります。

今後も本多静六博士を顕彰する会の皆様と連携しながら、博士の功績を全国に広めるための事業を、より一層充実してまいりたいと考えております。

結びに、本多静六博士を顕彰する会の益々の御発展と、会員の皆様の御健勝・御活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

目次

発刊にあたって 本多静六博士を顕彰する会会長 渋谷 克美	1
発刊を祝して 久喜市長 梅田 修一	2
発刊を祝して 埼玉県知事 大野 元裕	3
本多静六博士について	4
略年譜	5



発刊を祝して

埼玉県知事 大野 元 裕

本多静六博士を顕彰する記念写真集が刊行されますことを、心からお祝い申し上げます。

博士は、本県が誇る偉人の一人であります。明治32年に日本最初の林学博士となり、全国各地の森づくりに尽力されたほか、明治神宮の森の造営や日比谷公園、大宮公園などの都市公園の設計を手がけられ、日本の造林学、造園学の基礎を築かれました。

また、博士は自身の考案した儉約と貯金法を生活の中で実践した資産家であり、さらにその貯蓄を惜しみなく社会へ還元した社会活動家・慈善活動家でもあります。

博士は、昭和5年に秩父市（旧大滝村）の中津川地域に所有していた森林を人材育成に活用することを条件に県へ寄付されました。県では、この森林から得られる収益をもとに、「本多静六博士育英基金」による奨学金を創設し、これまで2000人以上の奨学生を輩出しております。

本県は今、人口減少と超少子高齢化という大きな転換期に差し掛かっていますが、私は人口減少下にあっても、社会全体の生産性向上により持続的に発展していく社会を構築したいと考えております。これを実現するためには、博士の遺志のとおり、人材の育成が非常に重要と考えます。博士が海外留学をされ、様々な知識と経験を糧にその後大成されたように、私も未来を担う若い方の支援に力を尽くしてまいります。

結びに、この写真集を通じて、博士の足跡が改めて認識され、博士の偉大な功績が広く世に伝わることを心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

写真集

〈1〉 誕生からドイツ留学まで	6
〈2〉 大学教授時代	10
〈3〉 家族・家庭生活	15
〈4〉 調査・旅行先での様子	20
〈5〉 伊東市・歓光荘時代	25
〈6〉 本多静六博士肖像写真	29
〈7〉 本多静六博士ゆかりの地	36

本多静六は江戸時代末期の慶応2年（1866）7月2日に現在の埼玉県久喜市（当時武蔵国埼玉郡河原井村）の折原家の第6子として生まれました。生家は代々村役人を務めた裕福な家でしたが、静六が9歳の時に父親が急逝し、一家の生活は困窮し経済的に厳しい時代が続きました。しかし、家庭が困窮したことでかえって学問が好きになり、14歳の時に兄の恩師をたよりに上京し書生生活を送ることになります。ただし、農繁期の半年は実家に帰り農作業を手伝うというのが条件でした。

17歳のとき恩師の勧めで東京山林学校（後の東京帝国大学農科大学）に入学しますが、特に林業に興味があった訳ではなく学費が安いというのが一番の理由でした。入学当初の成績は最下位でしたが、持ち前の負けず嫌いが功を奏し、卒業時には首席となっていました。

卒業を間近に控えた22歳の時、突然縁談話が持ち上がります。相手は一橋家の元家臣で彰義隊の幹部でもあった本多晋のひとり娘・銚子^{しやうこ}でした。銚子は英語も堪能で、日本で4番目の公認の女医という才媛でしたが、静六は勉学に差し支えるという理由でなかなか承諾しませんでした。静六の将来性を見込んだ義父となる晋は、静六があこがれていたドイツ留学への費用を支援するという条件で結婚が決まりました。

静六は卒業と同時にドイツ留学し、猛勉強の末わずか2年間という短期間で博士号を取得しました。帰国後は母校で教鞭をとり、32歳の時に日本で最初の林学博士となります。翌年教授となった静六は、林学に関する専門書を多く著わし、日本で初めて造園学の講義を行うなど、日本の林学の先駆者として、その発展と普及、指導者の育成に多大な貢献をしました。

大学での授業の傍ら、静六は鉄道防雪林や水源林の造成、鉱毒被害への対応策、防潮林研究、神戸六甲山の砂防のための造林など実業の分野でも活躍しました。中でも力を入れたのが日本各地の公園設計、改良計画です。静六は、生涯に19回にも及ぶ海外視察を通じて海外の公園の様子をつぶさに研究し、人々の心身の健康や地域の発展をも企図した公園を提言しました。

静六が設計・改良計画に携わった公園や城跡（福島鶴ヶ城や和歌山城など）、或いは町全体を公園化するという提案（長野県軽井沢や大分県湯布院など）の数々は全国に数百あると言われています。また、国立公園の創設にあたっては自ら調査費の提供を申し出るなどしてその実現に貢献しました。

一方、静六は学生時代の苦学の経験から、学者として大成するには経済的にも自立することが大切であることをドイツ留学で学びました。帰国後、静六は「四分の一天引き貯金（給料の4分の1は必ず貯金する）」を実行し、蓄えたお金を積極的に株や土地に投資することで、40歳の頃には大学からの給料より、株の配当や預金利子の方が多くなっていたと言います。こうした自らの生活について、静六は「私の財産告白」「私の生活流儀」「人生計画の立て方」という著書で世間に紹介しました。これらの著書は今も出版が繰り返され、多くの本多ファンを生み出しています。

後年静六は、蓄えた財産のほとんどを学校や公共の福祉団体等に寄付してしまいました。「貧乏を経験した者でなければ本当の幸福は分からない」という考え方から、子孫を幸福にするため、更には子孫に努力しやすい環境を整えるため、あえて寄附を実行したというのです。こうした静六の生き方、人生哲学は時代を超えた今でも人々を心酔させるものがあります。

- 慶応 2年(1866) 7月2日武蔵国埼玉郡河原井村(現埼玉県久喜市)の折原家に生まれる。
- 明治 9年(1876) 9歳 父禄三郎(長左衛門)が40歳で急死し、以後生活が困窮する。
- 明治13年(1880) 14歳 上京し島村泰の書生となる。農繁期の半年は帰郷し農作業を手伝う。
- 明治17年(1884) 17歳 東京山林学校(後の東京帝国大学農科大学)に入学する。
- 明治22年(1889) 22歳 元彰義隊幹部本多晋のひとり娘銚子と結婚し、婿養子となる。
- 明治23年(1890) 23歳 ドイツに留学し、2年でドクトルの学位を取得し明治25年に帰国する。
- 明治25年(1892) 25歳 帝国大学農科大学の助教授となる。
- 明治27年(1894) 27歳 静六の提案により日本で最初の大学演習林「千葉演習林」が創設される。
- 明治32年(1899) 32歳 論文「森林植物帯論」で日本初の林学博士となる。
- 明治33年(1900) 33歳 東京帝国大学農科大学の教授となる。
- 明治34年(1901) 34歳 日比谷公園の設計に着手、明治36年6月1日に開園する。
- 明治35年(1902) 35歳 足尾鉾山鉾毒調査会委員となる。
- 明治39年(1906) 39歳 中国・韓国へ出張(内閣)。
- 明治40年(1907) 40歳 欧米各国へ出張(内閣)。
- 明治42年(1909) 42歳 東京市水源経営調査委員会顧問となる。
- 大正 2年(1913) 46歳 マレー半島、ジャワ、スマトラ、ボルネオ等へ出張(内閣)。
- 大正 3年(1914) 47歳 東京大正博覧会審査官となる(農商務省)。
- 大正 4年(1915) 48歳 大日本山林会理事に選任。明治神宮造営局参与となる。
- 大正 7年(1918) 52歳 日本庭園協会理事長となる。
- 大正 8年(1919) 53歳 帝国森林会副会長となる。
- 大正10年(1921) 55歳 埼玉学生誘掖会会頭となる。欧米に出張(文部省)。同じ年の12月に妻銚子が57歳で亡くなる。
- 大正11年(1922) 56歳 欧米各国に出張(内閣)。
- 大正15年(1926) 59歳 都市美協会副会頭、帝国森林会会長となる。
- 昭和 2年(1927) 60歳 大学教授を退官、名誉教授となる。
- 昭和 3年(1928) 61歳 日本庭園協会会長となる。
- 昭和 4年(1929) 62歳 国立公園協会の副会長(会長は細川護立)となる。
- 昭和 5年(1930) 63歳 国立公園調査会委員となる。秩父に所有する山林を、奥秩父の開発と奨学金制度の創設等を希望条件に埼玉県に寄附する。
- 昭和 6年(1931) 64歳 埼玉県人会副会長(会長は渋沢栄一)となる。
- 昭和 9年(1934) 67歳 満洲国の森林調査に出張。
- 昭和12年(1937) 70歳 紀元二千六百年祝典評議委員会の委員となる。
- 昭和13年(1938) 71歳 東照宮三百年祭記念調査会委員長となる。
- 昭和17年(1942) 75歳 戦時貯蓄中央協議会委員となる。
- 昭和18年(1943) 76歳 静岡県伊東町(歓光荘)に転居する。
- 昭和22年(1947) 80歳 伊東町の教委委員となる。
- 昭和25年(1950) 84歳 伊東市特別市法審議会委員となる。
- 昭和27年(1952) 85歳 1月29日、伊東市内の国立療養所にて逝去。2月5日港区青松寺にて葬儀を行う。
- 昭和28年(1953) 埼玉県において本多静六博士奨学金貸与条例が制定される。

【例言】

- ・ 本書に掲載した写真には出典・提供・所蔵先のほか、資料番号が付されています。HNo●は本多家資料番号、ONo.●は折原家資料番号、KKAは個人所有のもので、特に提供者名のないものは本会のもので。
- ・ 印刷にあたっては写真の色調や欠損箇所等の一部調整、修正したものがああります。
- ・ 本書の編集は本会会長の渋谷克美が担当しました。 ・ 許可なく複製することはお断ります。

1 誕生からドイツ留学まで



1. 幸福寺とサイカチの木

静六がはじめて通った学校「河原井学校」は村内にある幸福寺の本堂である。当時の静六は負けず嫌いの腕白で学問嫌い、寺の境内にあるサイカチの木によく登っては遊んだという。

寺の本堂は当時の姿のまま、サイカチの木（写真手前左）も老木だが今も残っている。令和5年には境内に「本多静六出生の地の碑」が建立された（37頁参照）。

河原井学校の門札は現在本多静六記念館に展示されている。

2. 生家

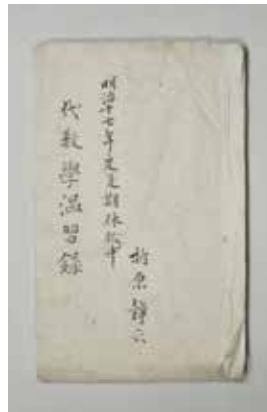
本多静六の生家・折原家・ONo.59 折原家は古くから河原井村（村高約230石）の名主を代々務めていた。祖父の友右衛門は不二道孝心講の大導師でもあった。不二道孝心講とは、富士山信仰の富士講から分かれた宗派で、鳩ヶ谷出身の小谷三志によって確立されたもので、質素儉約・勤勞奉仕・夫婦和合等の日常的道德実践を説いたのが特徴であり、静六も大きな影響を受けた。



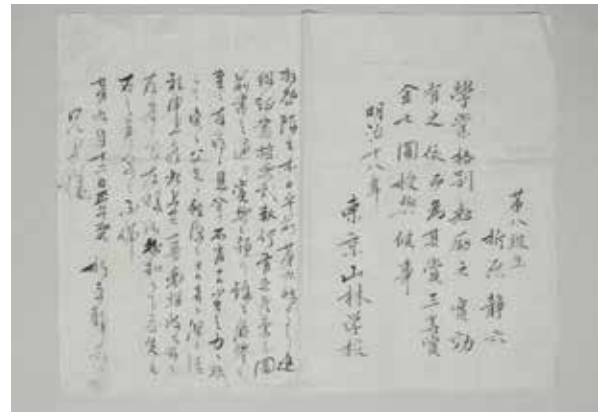
[東京山林学校に学ぶ]

東京山林学校の前身となる樹木試験場が、内務省により明治10年に北豊島郡西ヶ原（現東京都北区西ヶ原）に創設された。樹木試験場は、日本各地から送られてきた樹苗の栽培・分与、各種の調査および試験、洋書の翻訳、研究所や目録の刊行などで成果をあげた。内務省から所管が移った農商務省山林局は明治15年10月に山林学校の設立を決め、教場、化学教室、木材置場、学生寄宿舎を建築した。校名は東京山林学校と命名され、11月から事務を開始し、同時に山林局は廃止され、その業務は東京山林学校が行うこととなった。また、試験場も同校の附属となった。12月1日、開校式が農商務卿西郷従道臨場のもとに行われ、初代校長には松野礪が就任した。

山林学校の学資はすべて自弁であったが、「学業優秀で品行方正なる者」は、官費で修業できる特典があった。生徒はすべて寄宿舎に入った。入学志願者の資格は、年齢18歳以上25歳以下、普通中学を卒業した者、普通中学卒業者の外は、和漢書、講義書取、作文の試験に合格した者に限り入学が許可された。明治17年には、教場における生徒の席は試験結果の順とされていた。（HP 東大農学部歴史・歴史写真館参照）



3・4. 折原静六が一度落第点を取り、その後奮起して猛勉強したという幾何学と代数学（自筆）・HNNo.23・28



5. 山林学校での学業に励み三等賞を受賞したことを兄金吾に知らせた折原静六の書簡（明治18年）・ONo.4

6. 右の写真は明治18年頃のもので、東京山林学校のほぼ生徒全員と思われるもの（折原静六もいると思われるが特定は不可）。

恩師が欧州行に持参する写真ということで、全員制服で写したといわれる貴重な写真である。
（東京大学農学生命科学図書館所蔵）





7. 東京農林学校学生時代（明治 20 年代）・ H No 632

8. ターラント
山林学校（明
治 24 年）・ H
No 293



9. ターラント山林学校の教授らと（明治 23 年 5 月）・ KKA (1)



10. ドイツ留学壮行会（明治 23 年 3 月）・ KKA (1)

学友との記念写真。前列左から 3 番目が本多静六。本多銈子との結婚にドイツ留学を条件とした静六の夢が叶い明治 23 年 3 月 23 日横浜港を旅立った。船旅や留学先の 1 つターラント山林学校での様子は「洋行日誌」（「本多静六通信第 10 号」参照）に詳しく記されている。



11. ターラント山林学校の学友と (明治 23 年 5 月)・H No. 631



12. ターラント山林学校の学友と (明治 23 年 5 月)・KKA (1)

【明治二十三年洋行日誌】

下図のパネル展示には明治 23 年 3 月 23 日に横浜港を出港し、47 日間をかけて留学先のドイツ国ザクセン州ターラント町に到着するまでの出来事や山林学校での約半年間にわたる生活の様子などが記されている。



13. ドイツ留学についてのパネル展示の様子 (本多静六記念館)



14. ターラント山林学校修了証書



15. 林学実科三年級一同（明治 36 年 6 月）2 列目左から 6 番目が本多教授・H No. 292

16. 農科大学助教授時代（明治 26 年頃）・H No. 633



17. 台湾での山林調査（明治 30 年頃）・H No. 617 調査にあたっては命がけで探検隊を組織したと自伝に記している。

東京帝国大学農科大学



18. 駒場の農学部正門（大正 5 年頃）
（東京大学大学院農学生命科学研究科所蔵）



19. 林学教室（明治 37 年竣工、写真は 大正 5 年頃）



20. 林学教室列品室（大正期）



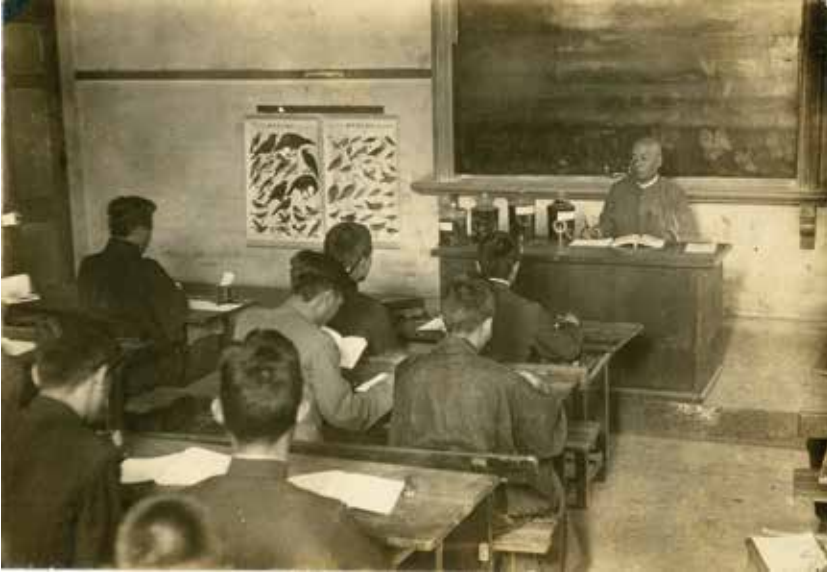
21. 中央建物が林学教室（写真 19～21. 東京大学農学生命科学図書館所蔵）

【本多静六の学生時代から教授時代にかけての大学の変遷】

明治 10 年内務省は樹木試験場を創設。同 15 年樹木試験場を東京山林学校に改称。同 19 年東京山林学校は駒場農学校と合併し東京農林学校となる。同 23 年東京農林学校を帝国大学に合併し帝国大学農科大学を設置。明治 30 年帝国大学を東京帝国大学に改称。大正 8 年東京帝国大学農科大学を東京帝国大学農学部と改称。大正 9 年東京帝国大学学位規則改正により農学、獣医学、林学の各博士号は農学博士に一本化される。昭和 10 年農学部の位置を駒場から本郷に移転する。



22. 昭和初期の農科大学全景、明治 36 年頃には農科大学全体で約 18 万坪の面積を有していた。（東京大学文書館所蔵）



23. 大学教授時代の講義の様子（大正期）
・ H No. 638

本多はドイツ留学の帰国時に持ち帰った1着の詰襟服を基に使いやすく工夫したものを愛用していた。

24. 明治神宮遷宮式に参列した明治神宮造営局の人々（大正9年11月1日）
・ KKA (4) 前列左から3番目が本多静六



25. 埼玉学生誘掖会寄宿舎第二周年記念写真（明治39年10月1日）・ H No. 285

埼玉学生誘掖会とは、都内の大学等に通う埼玉県出身の学生支援を目的に明治35年（1902）に設立した団体で初代会頭には渋谷栄一が就任した。寄宿舎は明治37年に竣工し、初代舎監には本多静六（前列右から6番目）が就任した。宿舎は平成13年度をもって廃止され、現在同会では奨学金の給付事業を行っている。





26. 千葉演習林での講義の様子（大正 14 年 8 月）



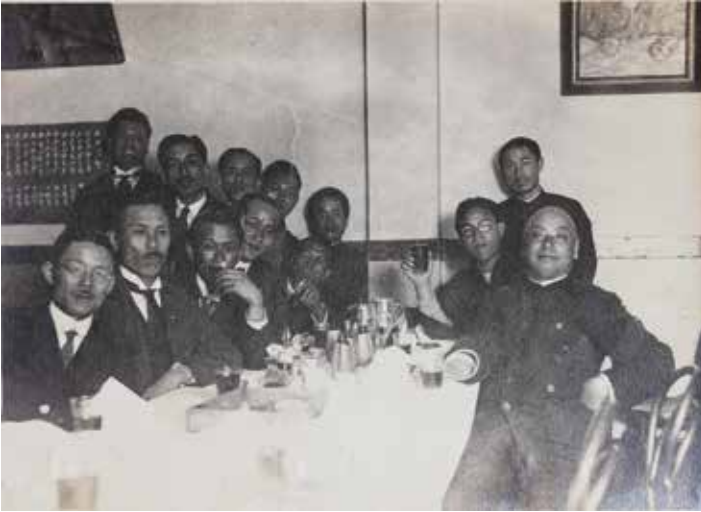
27. (左下) 千葉演習林での造園実習の様子（大正 14 年頃）・HN0.639



29. 千葉演習林内にある「演習林発祥の地」の石碑

(写真No 26, 28, 29 は東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林千葉演習林提供)

28. (右中) 千葉演習林宿舎で囲碁を楽しむ本多静六（大正 14 年 8 月）。東京大学の千葉演習林は、本多静六の提案により明治 27 年に日本で最初に大学専用の演習林として創設された。



30. カフェイーグルでの天ぶら会（大正14年4月）・H No. 583



31. 農科大学林学実科卒業写真（明治37年）前列左から3番目・H No. 622



32. 卒業生記念写真（大正期）前列右から3番目・H No. 619



33. 著書を背丈まで積み上げ微笑む（昭和初期）・H No. 598

本多静六は生涯に370冊余りの著書を著わした。その始まりはドイツ留学帰国直後から始めた「1日1頁の原稿執筆」の日課にあったといい、この日課を「毎日必ず書き続ける行である」と表現している。



34. 秋田県小坂鉦山にてニセアカシアの植林について講話する本多静六（大正15年7月）・H No. 643

鉦山の煙害対策として痩せた土地でも生育するニセアカシアが植樹された。



35. 妻・本多銚子 (大正期)・H No. 1323



36. 義父・本多晋 (大正期)・H No. 779



37. 義母・本多梅子 (昭和初期)・H No. 1405



38. 成医講習所学生時代の本多銚子(中央)、山崎富子(右)、松浦千里(左) (明治14年12月)・H No. 1380

39. 実母・折原やそ (大正期)・H No. 1394





40. 東京駒場の官舎での家族写真、後列右端が静六、左端が銚子（明治 32 年頃）・H No 591



41. 長女の夫の留学を記念しての家族写真、中央が静六（明治 45 年 1 月）・H No 733



42. 家族集合写真（大正期）・H No. 732



43. 大学演習林でのピクニックの様子（大正 14 年 4 月）・H No. 615



44. 大正 3 年に開園した鶴見花月園での家族親戚集合写真（大正 14 年 5 月）・H No. 578



45. 目黒雅叙園での親族集合写真（大正期）・H No. 627



46. 家族との記念写真（大正期）・H No. 621

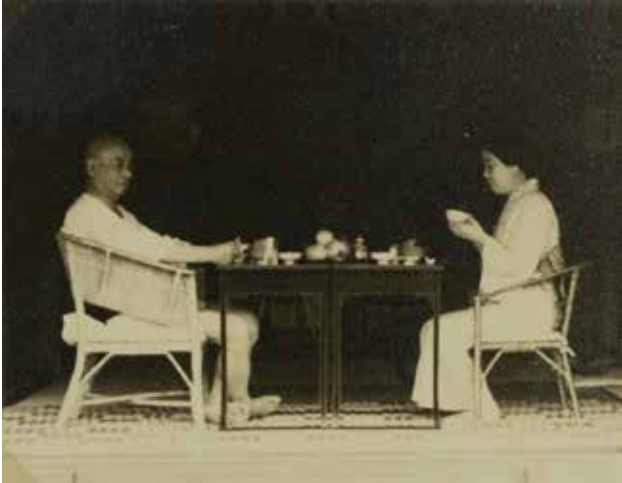
47(左). 48(右). 本多邸・KKA(1)

渋谷町桜丘に昭和7年6月23日に竣工した本多邸(昭和8年11月撮影)。同じ昭和7年10月1日渋谷町と千駄ヶ谷町、代々幡町が合併して東京市渋谷区が誕生した。

別荘風の瀟洒な造りが目を引く。下の写真(49)は書斎。65歳を過ぎたこの頃、本多は国立公園調査会委員、埼玉県人会副会長、埼玉学生誘掖会会頭、日本庭園学会会長などの要職を務め忙しくも充実した日々を送っていた。その様子は整然とした書斎の様子からも伺われる。



49. 本多邸書斎・KKA(1) 室内には天井まで届く作り付けの本棚が設置されている。



50. 自宅の縁側で朝食を摂る本多夫妻。右は後妻のいく夫人(昭和10年代)・KKA (4)



52. (左) 庭先での掃除姿、53. (右) 庭の水槽を指さす姿 (昭和10年代)・KKA (4)



51. 日課としていたラジオ体操をする夫妻 (昭和10年代)・KKA (4)



54. 野菜の手入れをする様子 (昭和10年代)



55. 箱根の別荘で (昭和10年代)・KKA (2)



56. 自宅書斎での様子 (昭和10年代)・KKA (4)

4 | 調査・旅行先での様子



57. 札幌放送局にて（昭和4年7月）・KKA（3）



58.（左上）大滝村視察時に（昭和25年7月）・H No.677

59.（左中）渡航先カリフォルニア州フレズノ市内のホテルにて（大正11年10月）・KKA（3）

60.（下）北米ヨセミテ公園世界爺巨木を視察（大正11年秋）・KKA（3）





61. 島根県松江市の雪道にて (昭和4年2月)・KKA (3)



62. 宮城県山林会の折 (大正10年8月) 陸前金華山神社前・KKA (3)



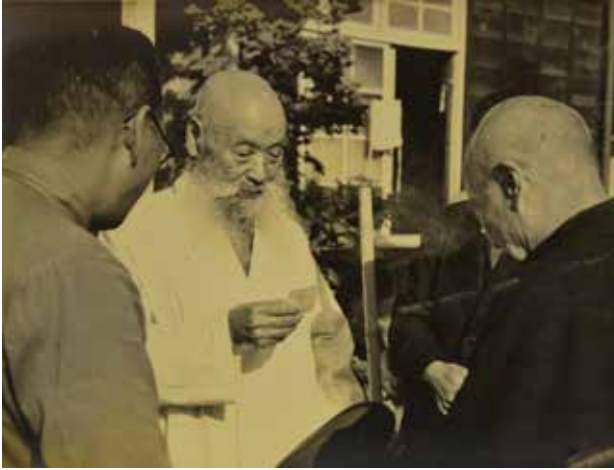
63. 肥後山林会総会での林地視察団記念 写真中央 (昭和2年8月)・KKA (1)



64. 新潟県笹神村（現阿賀野市）にある村杉温泉を視察したときの様子（大正8年）・個人所蔵



65. 腰に巻き付けたロープに曳かれ軽快に山道を登る（昭和初期）。脚部にはゲートルを巻き付けている・KKA（1）



66. (上左) 秩父セメント視察
(昭和 24 年 10 月)・HNo 669



67. (上右) 秩父セメント視察
(昭和 24 年 10 月)・HNo 670

秩父セメントは諸井恒平により大正 12 年に創設された。本多は秩父武甲山が石灰岩を多く含むことを紹介するなど会社の創設に深く関わった。

68. (右) 埼玉県大滝村大血川
東京大学演習林作業所にて
(昭和 25 年 7 月)・HNo 681

本多はこの作業所に一泊した際、芳名録に当地が国立公園になることを記念し名物として「翁智（大血）ソバ」を提案している。



69. 秩父セメントでの記念写真 (昭和 25 年 8 月)・HNo 679



70. 岐阜大学農学部での記念写真 (昭和 25 年 9 月)・HNo 684
前年の昭和 24 年岐阜大学は農林専門学校を包括し農学部を創設、附属施設として演習林を置いたことから視察に訪れたと思われる。

71. (左上) 東京大学秩父演習林視察 (昭和 25 年 9 月) ・
H No. 692-2

72. (右) 東京大学秩父演習林視察 (昭和 25 年 9 月) ・
H No. 692-4



73. 東京大学秩父演習林視察 (昭和 25 年 9 月) ・ H No. 692-1



74. (上左) 静岡県南伊豆町にて (昭和 25 年 11 月) ・H No. 695

75. (上右) 加畑賀茂(かばたかも)神社のビャクシン(昭和 25 年 11 月)・H No. 697 静岡県南伊豆町にある伝承樹齢 1200 年のビャクシン



76. (下左) 伊東市民館での講演の様子 (昭和 23 年) ・H No. 660

77. (下右) 「大講演」と掲げられた立看板 ・H No. 659



78・79. (上左右) 伊東市鎌田・歓光荘の自宅で縁側から庭(菜園)を望む(昭和23年)・H No. 655・656

昭和18年本多静六は東京都渋谷区から伊東市鎌田の温泉付き分譲地・歓光荘に生活の拠点を移し亡くなるまでの10年間を過ごした。25歳の時にたてた「人生計画」において晩年は山紫水明の地に居を移し晴耕雨読の生活を送るという計画を実行したのである。庭では数多くの野菜類を育て、昼は農作業に夜は勉学に勤しんだ。高台にある建物からは相模湾を挟み遠く千葉県の大塚山も見渡せた。



80(上)・81(右). 歓光荘での生活(昭和23年)・H No. 654・579 歓光荘では妻いくと妻の妹家族との共同生活を送っていた。二家族は同じ敷地内に2棟の建物を建て、渡り廊下で繋がれるようにしていた。

伊東市に転居した後も本多は国内各地に講演や視察に出かけるなど精力的な活動を続けた。地元伊東市では教育委員や伊東市特別市法審議会委員等も務めたが、伊東市における本多の活動記録は、昭和33年の狩野川台風の被害により多くの行政資料が喪失したため記録の確認が難しい状態にあるという。



82. (左上)・83. (右上) 歓光荘の自宅敷地内の畑で農作業に勤しむ。写真 83 の右後に見えるのは自宅の屋根で場所は敷地内の石畳の道 (昭和 23 年)・H No 662・663

畑ではサツマイモ、ジャガイモ、サトイモ、カボチャ、落花生、トウモロコシ、ニンジン、ゴボウ、タマネギ等の他、柿、蜜柑、枇杷、無花果等も栽培していたという。



84. 歓光荘の自宅書齋で雑誌を読む (昭和 23 年 10 月)・H No 664

85. 歓光荘の自宅書齋で来客者と (昭和 24 年 12 月)・H No 673



86. 歓光荘自宅の書齋で執筆に励む（昭和25年8月）・H No. 691



87. 歓光荘自宅の書齋で（昭和26年頃）・H No. 580



88. 歓光荘自宅の庭先で（昭和26年頃）・H No. 686

本多は歓光荘での日課について「朝はたいてい5時半に起きる。必ず6時のラジオ英語を聞き終えて朝食にする。朝食後は30分間の食休み、次いで書齋に入って読書又は執筆を始める。11時頃に到着の郵便を開いて直ちに返事を要するものには返事を認める。12時にはニュースを聞きながら昼食を始める。好天気には1時から畑に出て百姓仕事に精を出す。（中略）夜はずっと執筆時間にあてる」という生活を送っていた。



89. 伊東温泉で開かれた埼玉県人会記念写真（昭和25年10月）・H No. 693



90. 歓光荘自宅で家族・来客者と共に（昭和26年頃）・H No. 581 歓光荘に移り住んでからも本多の元には友人・知人をはじめ出版社、新聞社の者などが度々訪れていた。



本多静六は数多くの肖像写真を残している。多くは本多のトレードマークとも言える詰襟服姿であるが、中には礼服姿等の比較的珍しい写真もある。

91. (左上) モーニング姿 (大正3年11月)・HNo.596
この年本多は47歳で、内閣より高等官一等に叙任された。
92. (左下) 東京帝国大学農科大学林学科教室にて (大正14年1月・58歳)・HNo.611
93. (中右) モーニング姿 (大正9年5月・54歳)・KKA (1)
94. (右下) 詰襟服姿 (大正15年11月)・HNo.573
この年は60歳となり翌年定年退官するとともに正三位勲二等に叙せられた。





95. 詰襟服姿 (大正 15 年頃) ・ HNo. 614



96. 詰襟服姿 (大正 15 年頃) ・ HNo. 613



97. 文官大礼服着座姿 (大正 10 年 11 月) ・ HNo. 571



98. 文官大礼服立ち姿着帽 (大正 10 年 11 月) ・ KKA (1)



99. 明治神宮にての神職装束姿 (大正9年11月)・KKA (1)



100. 東京帝国大学農科大学造林学教室にて (大正14年8月)・H No 640



101. 造林学教室にて (大正14年12月)・H No 641



102. 造林学教室にて (昭和2年6月)・H No 646



103. 詰襟服姿（昭和初期）・H No.594



104. 書齋にて（昭和初期）・KKA（2）



105. 歓光荘にて羽織袴姿（昭和19年3月）・H No.600



106. 放送局にて（昭和4年4月）・KKA（1）



107. 帝国森林会会長室での執務の様子（昭和5年）・KKA（1）



108. 東京大学秩父演習林を視察した際の宿泊先で（昭和25年9月）・H No 692-5



109. 愛用の杖を片手に山道を散策する姿（昭和25年2月）・H No 688-1 晩年においても健康のため1日2時間は散歩をしていたという。



110. 国立公園制定20周年を記念し読売新聞社伊東通信部が伊東市観光荘を訪れて写す（昭和26年9月）・H No 584



111. 伊東市歓光荘の自宅書齋で（昭和24年）・H No. 666 著書には「夜6時にはラジオ英会話で中学生に若返り、夜はずっと執筆時間にあて、時に深夜1、2時に及ぶことがある」と著している。



112. 伊東市歓光荘の自宅書齋で（昭和24年）・H No. 665



113. 伊東市歓光荘の自宅書齋で（昭和26年頃）・H No. 580



114. 知人宅の玄関先で（昭和24年）・H No. 572 愛用の杖と帽子を手に

日本で4人目の公認女医
女医・本多銚子



115. 銚子と結婚した頃の静六・H No. 632



116. 医学生時代の銚子 (東京慈恵会医科大学所蔵)



117. 本多銚子に関する展示 (本多静六記念館)



118. 銚子が往診の際に使った医療用具

14歳にして外交官婦人の通訳を務めたという銚子は英語にも堪能で、早くからその才媛振りを発揮していた。またキリスト教徒でもあった銚子は、女医となつてからは、経済的に苦しい人には無料で診療を行ったり、少額で薬を分け与えたりするなどした。静六が留学から帰国すると、医師を辞め夫を陰で支えながら子どもを育て上げ、夫が出張で留守がちな家庭を守るという典型的な良妻賢母であった。

7 本多静六博士ゆかりの地

1 本多静六記念館(久喜市菖蒲町新堀)

本多静六記念館は没60年記念事業の一環として、久喜市菖蒲総合支所5階に整備されたものです。記念館には本多静六直筆の資料(教科書や書簡等)や遺品などの貴重な資料をはじめ、日比谷公園の模型や公園設計資料、本多が手掛けた全国各地の公園や観光地のポスター・写真などが展示されています。

また、日本で4人目の公認の女医であり、妻であった銚子と、彰義隊の頭取を務めた静六の義父・本多晋に関する資料も展示されています。開館日等は巻末参照。

1	本多静六記念館	36
2	本多静六博士生誕地記念園	37
3	本多静六博士の森	38
4	奥秩父中津峡	39
5	埼玉県営大宮公園	42
6	日比谷公園	44
7	明治神宮	45
8	羊山公園	46
9	伊佐沼公園	46
10	飯能遊覧地	47
11	嵐山溪谷	47



119. 設計等に携わった各地の公園等を日本地図に表したものの。中央のケースでは公園設計書を展示。



120. 展示の様子。壁面は明治神宮の森をモチーフにしたもの



121. 日比谷公園の模型(400分の1)と等身大パネル

2 本多静六博士生誕地記念園 (久喜市菖蒲町台)

本多静六博士生誕地記念園は、博士の顕彰事業の最初の事業として没40年を記念し、平成4年に整備されたものです。広さは約400㎡で園内には胸像をはじめ、日比谷公園の「首かけイチョウ」の接ぎ木や公園等一覧記念碑があります。また博士が国内での普及に携わったといわれているユリノキが植えられています。

胸像の台座には博士がこよなく慈しんだという秩父市大滝地区で採取された中津川県有林産の石が使われています。

記念園は圏央道白岡菖蒲IC近くの「道のオアシス」内にあります。



122. 胸像と公園一覧碑



123. 首かけイチョウの接ぎ木



124. 本多静六博士生誕地記念園

幸福寺と サイカチの木

久喜市菖蒲町河原井にある幸福寺境内には令和5年「出生の地の碑」が建てられました。山門付近にあるサイカチの木には、子どもの頃によく登っては遊んだという思い出を自伝に残しています。



125. 本多静六出生の地の碑



126. サイカチの大木

3 本多静六博士の森（久喜市菖蒲町三箇）

本多静六博士の森づくりは、埼玉県が「彩の国みどりの基金」を活用し、本多静六が明治神宮の森を造成したときの自然の力を活かした森づくりの考え方を取入れ、森林の少ない地域に県民参加で新たな森林を創出する取り組みとして行っているものです。

久喜市菖蒲町三箇にある森はその第1号で、ドングリから育てたコナラやクヌギを平成21年3月に植樹したものです。植樹には地元三箇小学校の緑の少年団をはじめ、地元自治会、一般市民の方、本多静六博士を顕彰する会会員等が参加しました。現在森は顕彰する会の会員により管理され、順調に生育を続けています。



127. 三箇の森公園から森を見た様子



128. 県内で採取したコナラやクヌギ等のドングリから成長して育った現在の「本多静六博士の森」の様子



129. 植樹当日の様子（平成21年3月）



130. 顕彰する会会員による下草刈りの様子

4 奥秩父中津峡（秩父市大滝地区）

本多静六と秩父との関係は50年以上にも及び、その間本多は度々奥秩父を訪れています。そうした中「森林公園と奥秩父（中津峡）の景勝」（昭和5年頃）と題した著作の中で中津峡の魅力について次のように記しています。（以下要約）「その景趣は雄大にして幽邃閑雅（物静かで奥深く、閑静でいて雅）、一度この景に接すれば真に崇高なる大自然に心身を委ねるの快感が沸き起こるのである。春の新緑によく、夏の清涼によく、冬の雪によく、殊に秋の紅葉は塩原、日光等に勝るとも劣らない。交通施設が整えば、中津峡を中心とする奥秩父一帯を森林公園となし、なお諸種の設備をなすに至らば実に帝都市民の遊覧、娯楽、休養の地となるべきのみならず、一般民衆の避暑地、遊覧地として我が国有数の名勝公園となるを疑わない」。

また、この頁に掲げた写真は昭和25年7月に12泊で奥秩父を訪れた際のもので、その背景には同年7月に秩父地域一帯が国立公園に指定されたこと、前年11月に県有林事務所に森林寄贈の記念碑「樹徳千載」が建てられたことなどがあったようです。



131. 秩父市強石・高野氏記念碑前にて（昭和25年7月）・H No 585-2-1



132. 大山沢入口にて（昭和25年7月）・H No 585-4-1



133. 本多先生の強力を務める技師（昭和25年7月）・H No 585-5-1



134. 大若沢よりトロリーにて向かう（昭和25年7月）・H No 585-6-1



135. 橋を渡りながら目を瞑って「南無阿弥陀仏」（昭和25年7月）・H No 585-7-1



136. 溪流に夢をむすぶ（昭和25年7月）・H No 585-7-3



137. 溪流で憩う（昭和25年7月）・H No 585-9-1



138. 山吹谷からの帰り道の溪流にて（昭和25年7月）・H No 585-11-1



139. 県有林記念碑「樹徳千載」の前にて（昭和25年7月）・H No 585-13-1

4 奥秩父中津峡（彩の国ふれあいの森）



140. 彩の国ふれあいの森・こまどり荘（宿泊施設）



141. 彩の国ふれあいの森・森林科学館



142. 森林科学館内での本多静六に関する展示の様子



143. 森林科学館にある本多静六胸像



144. 彩の国ふれあいの森の側を流れる中津川、中央はふれあい橋（つり橋）



145. 県有林の沿革と本多の山林寄附を記した記念碑「樹徳千載」

4 奥秩父中津峡



146. 中津峡 (中双里地区)



147. 中津峡 (中双里～中津川地区間)



148. 中津峡 (中双里～中津川地区間)

5 埼玉県営大宮公園（さいたま市大宮区）

公園の面積を4倍にして人工の池をつくる

大正10年5月本多静六は「埼玉県氷川公園改良計画」（右の図、現在の第2・第3公園部分を除く）を発表しました。この計画が現在の県営大宮公園の基本構想となっています。本多は隣接する氷川神社と公園の敷地を明確に分離するとともに、面積を4倍に拡張し、人工の池や児童遊園地、大運動場等のほか、桜林や松林等を整備することで、県民のみならず都市市民の行楽の場となるよう提案しました。計画では公園全体を3区域・3期に分けて整備するよう提言しました。

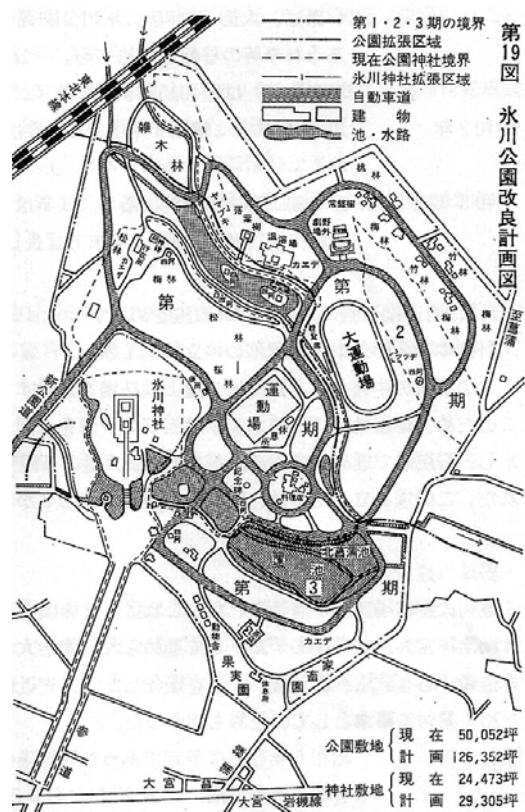
計画の内容は時代の流れと共に一部変更もありましたが、大宮公園は本多が全国各地の公園設計の実務で培ってきた多くの経験が活かされた代表的な公園といえます。



149. 児童遊園内の飛行塔



150. 動物園



氷川公園改良計画図、『大宮市史 第4巻 近代編』(昭和57年)より



151. ポート池の様子 本多の計画では池の中に2つの島を造り四阿を整備する構想があった。



152. 桜林とアカマツが特徴の「自由広場」、改良設計される前の公園区域が中心となっている。



153. 埼玉百年の森（博物館脇）



154. ポート池のほとりに建つ売店・食堂



155. 県立歴史と民俗の博物館



156. ポート池を取り囲む遊歩道



157. 池から見た埼玉百年の森



158. 大宮公園第二公園入口付近にある見沼源氏堂の碑

6 日比谷公園（東京都千代田区）

本多静六が初めて設計に携わった日比谷公園は明治36年に開園し令和5年に開園120周年を迎えました。建築家の辰野金吾のもとを訪れ公園設計のアドバイスをしたのがきっかけで、本多が設計を引き受けることになったのです。

日本最初の洋式公園ということで、ドイツ留学の経験をいかし設計図を書き上げました。「門扉を付けないと草花が盗まれる、池を造れば身投げの名所になる」等の質問や意見に丁寧に応えながら、公園は道徳心を養う場であり、人々の心身の癒しの場であることを訴えました。日比谷公園の設計を契機に全国各地から公園設計の依頼が相次ぐようになりました。



159. 雲形池にある鶴の噴水



160. 「都会のオアシス」とも評される日比谷公園は様々な歴史と共に歩んできた公園でもある。



161. 「庶民にも気軽に洋食を」という思いから公園と共に整備された松本楼（右）と側に佇む「首かけイチョウ」



本多静六の首かけイチョウ

日比谷交差点の拡張に伴い伐採されそうになった当時樹齢400年の大イチョウを「自分の首に賭けてでも移植を成功させる」と言ったことからこの名が付いた。

公園に残る歴史遺産

162. (左) 開園当時の水飲み

人も馬も水が飲めるように工夫されている。

163. (右) 開園当時のアーケ灯

アーケ灯は明治15年に初めて銀座に設置されたもので、当時としては珍しく明るさは2千燭光あったという。

7 明治神宮（東京都渋谷区）

明治神宮は国家の粹を集めて創建された神社であると共に、森づくりに携わった本多静六らにとってはドイツ留学で学んだ「天然更新」というこれまでにない新しい考え方で、100年で自然の森を造るという実証・実験の場でもありました。

大正9年に創建した明治神宮は令和2年に100周年を迎えました。今や森は天然林の様相を示し、世界的にも貴重な森であると言われています。

右の写真は南参道の鳥居で、鳥居のすぐ右には本多の郷里から移植したクスノキがあります。



164. 南参道の鳥居



165. (上) 南参道

166. (左) 南参道御橋から望む樹木

水の流れと高低差、楓等の紅葉する樹木等もあり景観に彩りを添えている。

167. (右) 宝物殿付近には広々とした芝地が広がる。

8 羊山公園（秩父市）

羊山公園と言えば「芝桜の丘」が有名ですが、芝桜が植えられるようになったのは比較的最近です。羊山の名称は、戦前に県営緬羊種畜場が設置され一帯を羊山と呼ぶようになったためといます。それ以前は秩父公園と呼んでいました。秩父町の依頼により本多がこの公園を設計したのは昭和11年のことです。設計には当時の観光協会や商工会、秩父鉄道等も大きな期待を寄せていたようです。



169. 羊のいるふれあい牧場

本多が当時設計した区域は、現在の見晴しの丘、姿の池、羊山グランド等の現在の公園東側の一部でしたが、その後面積が拡張され現在に至っています。



168. 見晴しの丘からは秩父市街が一望できる。写真中央はハーブ橋としても有名な秩父橋。



170. 夏季整備中の芝桜の丘



171. 芝生広場から武甲山を望む

9 伊佐沼公園（川越市）

伊佐沼は関東では印旛沼に次ぐ広さで、古くから貴重な野鳥や動植物の宝庫として知られていました。現在は周囲約2.5km、沼面積約22haで農業用溜池でもあります。沼の西側には市立伊佐沼公園があります。大正15年2月川越市の都市計画に関連して招聘された本多は、伊佐沼を景観の良さから遊覧漁獵地とするよう提案しました。



172. 伊佐沼の遊歩道と桜並木



173. 伊佐沼公園内のじゃぶじゃぶ池

10 飯能遊覧地（飯能市）

本多は飯能遊覧地委員会の招きにより明治45年5月8日に「飯能遊覧地設計」と題した講演を行いました。観光振興を目的に天覧山、多峯主山等を含む地域一帯を公園として整備するよう提言したもので、その内容は多岐に及びました。

現在この地域一帯は遊歩道や登山道が整備され、四季を通じて多くの人々が訪れています。

左下の写真は多峯主山から吾妻峡へ向かう途中の緩やかな曲線を描く遊歩道。丸太を利用したベンチが景観に映えます。

右下は多峯主山頂（271m）の様子。山頂からは飯能市街が一望できます。写真左下に見える小高い山が天覧山（197m）で、麓の能仁寺から約20分で登れて眺望を楽しめます。



174. 多峯主山から吾妻峡へ向かう途中の遊歩道



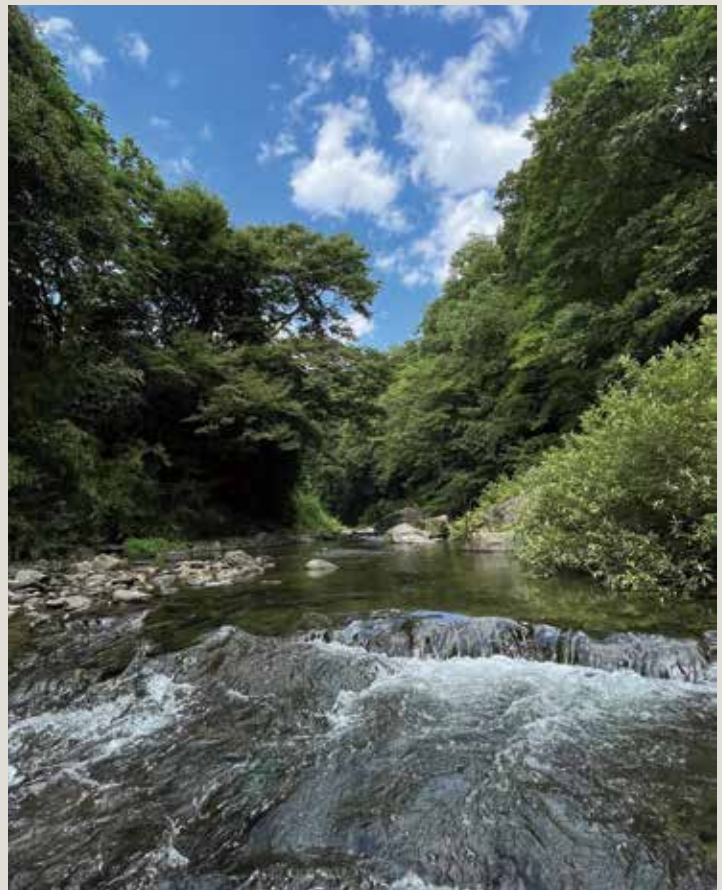
175. 多峯主山頂の様子

11 嵐山溪谷（嵐山町）

本多静六は昭和3年に当時の比企郡菅谷村を訪れ、「近くにある溪谷が京都の嵐山の風景に似ている」として「武蔵嵐山」と名付けました。これを契機に村は観光にも力を入れるようになり、昭和42年の町制施行の際に町名を「嵐山町」としました。



176. 「嵐山町名発祥之地」の石碑



177. 溪流の流れが涼やかな嵐山溪谷



178.

本多静六記念館

〒346-0192 埼玉県久喜市菖蒲町新堀 38

久喜市菖蒲総合支所 5階 電話 0480-85-1111 (代)

開館日時等：日曜日～金曜日 (9:00～17:00)・入場無料

休館日：土曜日、祝日、年末年始 (12月29日～1月3日)

本多静六博士没七十年記念写真集

人生即努力 努力即幸福

編集・発行 本多静六博士を顕彰する会
会長 渋谷克美

協力 久喜市・久喜市教育委員会

発行日 令和6年3月15日

印刷 有限会社イノウ印刷

○本書の作成にあたりご協力を頂いた皆様（敬称略・順不同）○

本多俊子 金子由紀子 黒木喜久子 折原金吾 久喜市 久喜市教育委員会 伊東市教育委員会 村杉温泉環翠楼
埼玉県農林部森づくり課 東京大学大学院農学生命科学研究科 東京慈恵会医科大学 幸福寺（久喜市菖蒲町河原井）

※表紙の写真は「農作業着姿の本多静六」（昭和26年頃）・H No. 575、裏表紙は「本多静六と妻いく」（昭和10年代）・KKA（4）

